

<b>Title</b>	ツアラトウストラとニーチェとの対話
<b>Author</b>	仲原, 孝
<b>Citation</b>	人文研究. 60 卷, p.54-72.
<b>Issue Date</b>	2009-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	山野正彦教授 : 中島廣子教授 : ピエール・ラヴェル教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

## ツァラトウストラとニーチェとの対話

仲 原 孝

本論考は、ニーチェの『このようにツァラトウストラは語った』第1部の中で、ツァラトウストラが特に一人の相手だけに向かって語りかけている箇所に注目し、ここで彼が語りかけている相手が、じつはニーチェ自身にほかならないことを立証する。この書のツァラトウストラもまた、ニーチェ自身のある一面を具現した人物であるのは明らかであるから、ニーチェはこの書で、自己自身のある一面や、過去の自己自身にむかって、自分で語りかけるといふ、自己対話のようすを再現してみせているのであり、そういう形で、彼は自分がそれまでに経てきた「自己超克」のありさまを、読者に示しているのである。特に、「隣人愛について」と題された節では、ツァラトウストラは一人の相手に向かって「永遠回帰思想」を暗示することを語っており、ここをニーチェ自身に対する語りかけとして読み解くことによって、永遠回帰思想が神の思想と同じく一種の形而上学的思想として構想されていること、そして、「超人」とはまさしく永遠回帰する世界の中で生を肯定する人間を意味しているということを、本論考は明らかにする。

### 序論

『このようにツァラトウストラは語った』は、あらゆる哲学書の中でももっとも広く読まれているものの一つであるが、なぜか徹底的に研究されたことがほとんどない書でもある。この書の理解に関するかぎり、我々は20世紀の初頭に出された註解（Naumann, 1899-1901; Weichert, 1922）から、本質的には一歩も前進していないと言っても過言ではない。大半の研究者は、ニーチェについて論じる場合でも、『ツァラトウストラ』にはほとんど言及しないか、せいぜい都合のいい文章を「つまみぐい」的に引いてくるだけで、全体を統一的に解釈するということをしない。ヨハン・プロスリナーはこう書いている。「ニーチェを（大抵は『反動主義的な反解放主義者』だとして）拒絶する人の九分九厘は、『ツァラトウストラ』から引用する。逆に、ニーチェを露骨に法外なまでに崇拜するけれど、『ツァラトウストラ』は無視するか、あるいはきびしく拒絶する、という人は少なくない」（Prossliner, 2002:9）。

本論考は、『ツァラトウストラ』の包括的な研究にひとつの土台を提供するために、これまでほとんど注目されたことのなかった視点からこの書を読みなおすことを試みたい。我々はこのでは、この書の特に第1部をとりあげ、ここでツァラトウストラ（以下「Z」と略記する）

が語りかけている相手が誰なのか、という問題に着目する。Zはほとんどの場合に、「私の兄弟たちよ」「私の友人たちよ」と、複数形で呼びかけながら語っている。この場合の語りかけの相手が、Zの「弟子たち」であることは言うまでもない（この「弟子たち」とは具体的に誰のことなのか、という問題がじつはあるのだが、本論考ではそれに立ち入ることはできない）。しかし、例外的にZが「私の兄弟よ」「私の友人よ」と、単数の相手に呼びかけながら語っている箇所がいくつかある。問題は、この単数の相手がいったい誰なのか、ということである。イエスが12人の弟子たちの中で特にペテロを信頼し、彼ひとりにむかって語りかけている光景が福音書にしばしば描かれているのを、ニーチェは模倣しているだけだ、と解すれば、それで済むことだと考える人もいよう。実際、これまで研究者たちは、Zのこうした呼びかけ方の特徴にはまったく注目してこなかった。先にあげたプロスリナーは、「Z」から「私の兄弟たちよ」などの呼びかけをすべて削除しても、この書の内容に何のちがいも生じない、と言いきっている（Prossliner, 2002:43-46）。

本論考は、こうした安易な理解に異義をとまえ、Zの呼びかけ方にはじつは重大な意図がこめられていることを明らかにする。結論から先に言えば、Zが単数で語りかけている箇所の大半は、Zがほかならぬニーチェ自身にむかって語りかけている箇所なのである。もちろん、Z自身もまたニーチェ自身のある一面を具現した人物であるから、要するにこれらの箇所は、ニーチェの自己対話のようすを再現してみせているのである。「Z」の最終的な帰結である「永遠回帰」思想の意味を考える時に、こういう観点から本書を読み解くことが重要な帰結をもたらすことを、我々は本論考の最後に示すであろう。

## 1. 「市場の蠅について」

### 1.1. 賛成と反対とのあいだに椅子を置く

「Z」第1部の「市場の蠅について」と題された節は、冒頭から最後まで、一貫して「私の友人よ」と、ひとりの相手にむかってZが語りかける形をとっている。そこで、まずこの節でZが語りかけている相手が誰であるかを考えることから始めよう。

この節は内容的には、短い導入のあと、大きく二つの部分から構成されていると見ることができる。前半[KSA:4/65.11-66.21]の主題は、「市場」で民衆の名声を博している「俳優たち」であり、後半[KSA:4/66.22-68.14]の主題は、「市場」を飛びまわっている無数の「毒蠅たち」である。もちろん、「俳優」も「毒蠅」も比喩であって、年の市などになると大道芸人たちが登場し、売られている食物に蠅がたかるのが常であることになぞらえて、Zは民衆があつまる大都市の典型的な特徴を描いているのであり、さらにひとりの「私の友人」にむかって、こうした「俳優」や「毒蠅」に用心するよう説いているのである。

さて、ではこの「俳優たち」とは、具体的にどういう人々であるか。

世の中では、最善の物事も、それを初演する人がいなければいまだ何の役にも立たない。こうした上演者たちを、民衆は偉大なる人々と呼ぶ。

民衆は偉大なものについて、すなわち創造するものについて、ほとんど理解していない。しかし民衆は、偉大な物事の上演者たちと俳優たちに対しては、感覚をもっている。

世界は新しい価値の発明者たちのまわりを回っている。——世界は目に見えない仕方で回っているのである。ところが、民衆と名声は、俳優たちのまわりを回っている。それが世間というものである。

[KSA:4/65.11-19]

どんなに偉大な歌劇や交響曲が作られても、それを初演する人がいなかったら、つまりそれが一度も現実の音として響いたことがなかったら、何も作られなかったのに等しい。それと同じように、どんなに偉大な思想でも、それを民衆にむかって効果的に「上演」する人がいなかったら、それは世界を動かす力とはならない。しかし民衆は、思想の創造者たちと、思想の上演者たちとのちがいを理解することができず、自分たちの目をひきつける上演者たちの方ばかりを「偉大なる人々」と見なして賛美する。それが「世間というもの」(der Welt Lauf)の常なのだ、とZは述べているのである。ここで、「上演者たち」「俳優たち」が複数形で語られているのは、以上のことが、いつの時代でもどの社会でも成り立つ一般的な真理であるからにほかならない。

ところが、このあと、突如として「俳優」(der Schauspieler)が単数で語られはじめるのである。

俳優は、精神をもっているが、精神の良心はほとんどもっていない。彼はいつでも、もっとも強く信じさせる手段を信じている——彼自身を信じさせる手段を！

明日になれば、彼は新しい信仰をもち、明後日になれば、もっと新しい信仰をもつ。彼は民衆と同じように、すばやい感覚と、変わりやすい嗅覚をもっている。

投げたおすこと——それが彼にとっては、証明することを意味する。狂わせること——それが彼にとっては、確信させることを意味する。そして、血はあらゆる根拠にもまして最善の根拠である、と彼は考えている。

繊細な耳にのみ忍びこんでくる真理を、彼は嘘や虚無と名づける。まことに、彼は世界に大きな喧騒を引き起こす神々だけを信じている。[KSA:4/65.20-66.5]

定冠詞つきの単数名詞を使っても、もちろん俳優一般をあらわすことはできるが、それまで複数を用いていたのをわざわざ単数にきりかえているのには、何らかの意図があると考えなければならない。上の引用中で、「投げたおすこと」(Umwerfen)がすなわち証明することだと

この「俳優」は信じている、と言われているのに注意しよう。ここでは「投げたおす」と直訳しておいたが、その意味は、もちろん精神的に投げたおすことであり、つまり「動転させる」ことである。この「俳優」は、人々を動転させる（例えば、驚かせ、興奮させ、感動させ、泣かせる）ことができた時に、自分の正しさが証明されたと信ずるのだ、と言われているのである。さて、ニーチェは最晩年の『ワーグナーの場合』で、次のように語っている。

まず最初に彼〔ワーグナー〕の頭に浮かんでくるのは、無条件に確かな効果をもつ場面であり、身振りの高浮き彫りをもった本物の演技であり、つまり投げたおす場面〔eine Scene, die umwirft〕である。

[FWag9, KSA:6/32.9-11]

この用語の一致は、単なる偶然ではない。『ワーグナーの場合』では、ワーグナーは「まったくもって偉大な俳優」と呼ばれている [FWag8, KSA:6/29.21]。さらに、ワーグナーは「音楽によって催眠術にかける」とも、「神経を説得する」とも言われているが [FWag7, KSA:6/29.4-6]、これは、『Z』から引用された先の文章で、「狂わせること」がすなわち確信させることだと俳優は信じている、と書かれていたのと、実質的に同じ事態を述べたものである。先に引用された、単数の「俳優」について語っている文章は、『ワーグナーの場合』でワーグナーを記述している言葉と、きわめてよく一致しているのであり、この単数の「俳優」とは、もっぱらワーグナーのことを指しているのだと考えてまちがいない。

Zは、この「俳優」を代表とする複数の「俳優たち」に用心せよと、一人の「私の友人」にむかって語りかけている。Zのこの「友人」は、俳優たちによって「是か、それとも非か」(Ja oder Nein) という問に答えるよう強要されており、しかも、このいずれの答も下すことができない彼は、「賛成と反対のあいだに椅子を置こうとする」という、どっちつかずの態度をとっている。さらに、彼はこの俳優たちに「嫉妬」しており、そのことをZによって戒められている [KSA:4/66.9-14]。このように、Zのこの友人は、俳優たちに対してある非常に限られた態度をとっている人物として描かれているのであるから、これを、Zの弟子たちを代表する任意の一人という一般的な意味あいでは解することはできない。ニーチェはZのこの友人として、だれか具体的な人物を念頭に置きながら、ここを書いていると我々は考えなければならない。では、それは一体だれであるか。

この「俳優たち」の代表がワーグナーであること、そしてニーチェの当時、ワーグナーに賛成する人々も、反対する人々も、もちろん無数にいたが、賛成でもあり、反対でもあるという曖昧な態度をとった人というのは、ごく限られていること、しかも、Zは自分のこの「友人」を、「真理の愛好者」(Liebhaber der Wahrheit) と呼んでおり [KSA:4/66.13]、彼は一人の哲学者(知恵を愛する者) でなければならないこと、等を考慮すれば、Zのこの「友人」とは、ほかならぬニーチェ自身のことである、という結論は、おのずと導かれてくる。

ニーチェがワーグナーに対して「賛成と反対のあいだに椅子を置」くという態度をとったことは、まぎれもない事実である。1876年7月に、完成したばかりのバイロイト祝祭大劇場で『ニーベルングの指輪』四部作の最初の上演がおこなわれるのにあわせて、ニーチェは『反時代的考察』の第四書『バイロイトにおけるリヒャルト・ワーグナー』を公刊した。晩年のニーチェは、「この書においてすでに、ワーグナーの本性における基本的な要素が俳優的天性と呼ばれている」ことを指摘して、この時にすでにワーグナーとの訣別が確定的であったかのように書いているが [EH: “Die Unzeitgemässen” 3, KSA:6/319]、事態はそれほど単純ではない。たしかにこの書でニーチェは、ワーグナーが「俳優的な根本的天性」の持主であると書いているし [UB4:7, KSA:1/467.32]、ワーグナーについての自分自身の「考察」を指して、「考察することにすらひそかな敵対が含まれている」 [UB4:7, KSA:1/466.27-28] と書いている。しかし他方で、この書が明らかなワーグナー賛美を含んでいることも、また確かなのである。

ワーグナーの音楽は全体として、偉大なるエフェソスの哲学者〔ヘラクレイトス〕によって理解されたとおりの世界の模像である。つまり、相克の中から生み出される調和であり、正義と敵対との統一性である。さまざまに異なった方向へむかって発してゆく多数の情熱から、総括的情熱の巨大な線を産出する可能性を、私は賛嘆する。 [UB4:09, KSA:1/494]

『バイロイトにおけるリヒャルト・ワーグナー』は、まさしくワーグナーに対する「賛成と反対とのあいだに椅子を置く」著作にほかならないのである。「市場の蠅について」で、Zの一人の「友人」が、「俳優たち」に対する「賛成と反対のあいだに椅子を置こうとしている」と言われているのは [KSA:4/66.10-11]、こうしたニーチェ自身の態度を回顧しているのであり、このような妥協的な態度をとっているかぎり、彼がめざしている「新しい価値の発明者」となるという目標に達することはできないということを、彼はZの言葉に託して自分自身で自戒しているのである。

## 1.2. 毒蠅たちに対する寛大さ

「市場の蠅について」の後半ではZは、市場（つまり大都市）に群がる「毒蠅たち」に用心せよ、と一人の「友人」にむかって忠告している。この毒蠅たちは「数えきれないほどいる」 [KSA:4/66.30] とされており、それが誰のことであるのかを具体的に特定するのは困難である。むしろこれは、大都市をいっぱい満たしている軽薄な民衆全般の比喩であると見るのが妥当であろう。しかし、これらの毒蠅たちに対してこの「友人」がとっている態度は、一義的に記述されている。彼は、「あまりに誇り高すぎる」がゆえに、この毒蠅たちに刺されても叩きつぶすということができず、それどころか怒ることすらせずに、「彼らには自分の生存

が卑小であることに対する何の咎もない」といって彼らをすぐに許してしまう、とされている [KSA:4/67.4-5, 11, 25-26]。これがニーチェ自身のことを語ったものにほかならないことは、例えばパウル・レーに対する彼の態度をみればよくわかる。妹からレーがひどい欺瞞者であったと聞かされたニーチェは、激怒のあまり、レーに宛てて辛辣な手紙を書いた（結局はこの手紙は送らなかったのだが）。

去年の夏の出来事に、あなたがどんなふうに関与していたかを、私は知ったのが遅すぎました、ほとんど1年も遅すぎました。こんな、こそ泥のような、嘘つきの、陰險なやつが、何年も私の友人を名のりえたと思うと、私はいまほど心が吐き気でいっぱいになったことは一度もありません。私はこういうことを、犯罪と呼びます。しかも、私だけに対する犯罪ではなく——何よりも、友情に対する、そして「友情」という名をまったく空虚にしてしまったことに対する、犯罪です。くそくらえだ、旦那！ [Pfu! mein Herr!]. [1883/7, KSB:6/434.2-9]

しかし、こういう怒りをニーチェは抱きつづけることができない。これからほぼ1箇月後にオーファーベックに宛てて書いた手紙では、彼は次のように書いている。

私はいまでも、レーや、ザロメ嬢について書かれた、どんな軽蔑的な言葉をみても、血しぶくのです——私は敵対するようにはできていません。私の妹は、「気持ちのいい嬉しい戦いです」などと、先日、手紙に書いてきたのですが。 [1883/8/14, KSB:6/450.30-33]

ニーチェはこういう自分の性格に深く根づいている寛大さが、自分自身を駄目にしてしまう危険があることを、Zの言葉に託して自分自身に言い聞かせているのである。「市場の蠅について」は、終始一貫して、Zがニーチェ自身に対して語りかけている言葉から成り立っている節なのであり、ニーチェはかつての自分自身のワーグナーに対する態度や、自分の周囲の人々に対する自分の態度をふりかえりながら、そこにひそんでいる危険性を、Zの言葉に託して、自分自身にむかって語りかけているのである。

## 2. 「山上の木について」

### 2.1. 若者の正体

以上で検討された「市場の蠅について」の冒頭で、Zは聞き手である自分の「友人」にむかって、こう語りかけている。

おまえは、おまえの愛するあの木と、もういちど似たものになれ、広々と枝をひろげるあの木と。あの木は静かに耳を傾けながら、海の上に枝をひろげている。[KSA:4/65.5-7]

人間を「木」にたとえるのは、同じ【Z】の「山上の木について」という節にもみられる表現である。この節には、Zのほかにひとりの「若者」が登場する。あるとき若者は、Zの姿をみると、いきなり逃げた。しばらくしてZは、若者が山の上で一本の木にもたれかかっているのを見つけ、近寄って語りかけた。

〔……〕人間に関することは、木に関することと似ている。

木が高みへと、明るいところへ至ろうとすればするほど、その根はますます強く張り出してゆこうとする。大地の方へと、下へと、暗く、深いところへと、——つまり悪へとだ。[KSA:4/51.16-20]

若者は、Zが自分の心の中を見事に見抜いているのに驚き、「そのとおり、悪へとだ！」(Jan's Böse!)と叫ぶ。つまり彼は、この「木」が自分自身のことをあらわす比喩であることを、即座に見てとったわけである。そこで彼は、自分が今かかえている悩みを、みずから吐露しはじめる。彼は、高みへとのぼることを急ぎすぎて、しばしば階段の段をとびこしてのぼろうとする。だが、こうして高みへのぼればのぼるほど、だれも彼を信じてくれなくなり、彼自身もますます自分が信じられなくなって、彼は「孤独の霜」にふるえている。しかも、なぜこんなことになるのか、彼は自分でも理解できなくて、途方に暮れている。こうした告白を聞いて、Zは若者にむかって次のように語りかける。

この木は山脈の中のここに、孤独に立っている。木は人間と動物とを超えて、高く生育した。

この木が語ろうとするならば、木は理解してくれる者をひとりももたないだろう。それほどまでに高く、木は生育した。

いまや木は待ちに待っている。——だが一体何を待っているのか？ 木は雲の座にあまりに近すぎる場所に住んでいる。木はおそらく最初の稲妻を待っているのではないか？ [KSA:4/52.19-25]

これを聞いて若者は、「そのとおりだ、ツァラトゥストラよ、〔……〕あなたは私が待っていた稲妻だ！」と答えている。つまり、Zの言葉の中の、「稲妻」はZを、「木」はふたたび若者をあらわす比喩になっているのであり、Zはこの木を描写するという形をとって、若者の現在のあり方を描写してみせているのである。

さて、じつはこの木の描写は、Zにとって単なる他人事の描写ではない。ニーチェが本書の構想を練っていた時期の遺稿に、「笠松と稲妻」と題する詩の草稿がある。



高く私は生育した、人間と動物とを超えて。

そして私は語る——だれひとり私とともに語らない。

..

あまりに孤独に、あまりに高く、私は生育した。

私は待っている。だが私は何を待っているのか？

..

雲の座はあまりにも私に近い、——

私は最初の稲妻を待っているのだ。[KSA:10/107]

一見して、「山上の木について」でのZの言葉とほとんど同じであるのは明らかだが、主語が「この木」ではなくて、「私」になっている。もちろんそれは、笠松の木自身がこの言葉を独白しているという形をとって書かれた詩だからであるが、同時に、ニーチェ自身が山上に立っている笠松の木に自分自身をなぞらえて語っているからでもあるのはまちがいない。『悦ばしき知恵』の第5書（『Z』公刊後の1886年になって新たに加筆した部分）に、「我々、理解しえない者たち」と題する節がある。そこに、次のように書かれている。

我々は古い樹皮を脱ぎすてる。我々は毎年春になるたびに脱皮する。我々はますます若くなり、未来的になり、高くなり、強くなる。我々は自分の根をますます力強く、深みへと——悪へと [in's Böse] ——張ってゆく。しかしまた同時に、我々は天を、ますます愛情にあふれて、ますます広々と抱くのであり、ますます渴しながら天の光を、我々のすべての枝と葉とでもって、我々自身の中に飲みこむのである。我々は木々のように生育する——それは理解しがたいことなのだ、すべての生と同じように！  
[FW:371. KSA:3/623.3-10]

この場合の「我々」が、ニーチェ自身を含む「我々哲学者たち」を意味していることは、言うまでもない。とりわけ注目されるのは、「悪へと」という、「山上の木について」とまったく同じ表現を用いている点である。「山上の木について」では、若者が高みへのほればのほるほど彼の根が悪へと張りだしてゆくということを、Zは木の比喩を使って語っていたのであるが、ここではまったく同じ趣旨の比喩が、ニーチェ自身のあり方をあらわすものとして語られているのである。

「山上の木について」に描かれている「若者」は、Z（ニーチェ）自身とは無関係な他人のありさまを描いたものでは決してない。この若者は、ニーチェ自身のある一面を、Zとは別の独立した人格として描いたものである。もう少し具体的にいえば、この「ニーチェ自身のある一面」とは、（次節で具体的に明らかにされるように）過去のニーチェ自身の姿であり、しかも同時に、（上の『悦ばしき知恵』からの引用を見ても明らかのように）それは現在のニーチェ

自身にもいまだに確実に含まれている一面でもある。つまり、現在のニーチェは、いまだに自己自身のうちに残存している過去の自己自身をたえず超克しつづけることによって、初めて現在の彼自身でありえているのである。彼は「山上の木について」で、こうした自己超克のありさまを、Zと若者との対話という形をとって再現してみせているのである。

Zが「おまえ」と2人称単数で語りかけている箇所の大半では、語りかけられる相手自身は本文中には姿をあらわさず、ただ語りかけているZの言葉だけが書かれているという形がとられているが、「山上の木について」では例外的に、Zに語りかけられる相手が一人の「若者」という形で本文中に登場してきている。しかし、このちがいは本質的なちがいはない。この節も「市場の蠅について」などと同様に、Zが単数の相手に語りかけている箇所のひとつであることに変わりはない。そして、この節も「市場の蠅について」と同じように、Zが語りかけている単数の相手はニーチェ自身なのであり、彼は若者に対して心に留めておくべきことを教示するという形をとって、自分が過去の自分自身を自己超克しつづけるために何が必要であるのかを、自分で自分の心に銘記させているのである。

## 2.2. 解放からの解放

では、「山上の木について」でニーチェは、具体的にどのような自己超克について語っているのだろうか。ここでZは若者にむかって、次のように語っている。

精神の解放された者も、なお自分を純化しなければならない。彼の中にはまだ多くの半獣と腐敗物とが残っている。彼の目はなお純粹にならなければならない。[KSA:4/53.15-17]

たしかに若者は、「人間と動物とを超えて」高く生育した。つまり彼は、単なる動物的生存をのりこえているのはもちろん、人間たちをいまだに支配している従来の道徳的先入観をものりこえている（『Z』では「人間」は、「超人」との対比をなす概念であり、超人によって超克されるべきであるかぎりでの従来の人間を意味していることに注意）。しかし、道徳的先入観から解放されただけで、すぐに人間が本当の自由を実現できるわけではない。『善悪の彼岸』でニーチェは、ひとは人物にも、祖国にも、同情にも、学問にも依存してはならない、という意味のことを述べたあとで、こう書いている。

自分自身が解放されていることに依存しないこと。ますますはるかな高みへと飛翔して、ますます多くのものを自分の下に見る鳥の、あの官能的な遠い異境に依存しないこと。——飛翔する者の危険。  
[JGB:41, KSA:5/59.12-16]

束縛から解放され、自由に飛翔できるようになった者がおちいりやすい危険は、こうして「解放されていること」それ自体に今度は束縛されてしまうことである。つまり、何が何でも従来の道徳を拒否しなければならないという先入観に囚われてしまい、従来の道徳も（ゆがんだ形においてはああるが）まぎれもなく「力への意志」の実現形態のひとつであるという積極的な意義が、見えなくなってしまうことである。伝統的な価値観を否定しなければならないという先入観にまだ束縛されているという意味では、若者はいまだ「牢獄」につながれた囚人であり、「腐敗物」（かつての思考様式の残渣）をかかえこんでいるのである。

いま『善悪の彼岸』から引用された文章では、「自分自身が解放されていること（eigne Loslösung）に依存しないこと」が必要だと言われていた。ニーチェは、1886年に『人間的、あまりに人間的』に新たに付した「序文」の中で、『人間的』を書いた当時の彼自身に起こっていた出来事を、「大いなる解放」（eine grosse Loslösung）と呼んでおり、しかもこの大いなる解放それ自身が、じつはひとつの「病氣」だったのだ、と述べている（MA1: “Vorrede” 3, KSA:2/15-16）。『Z』の時期のニーチェは、この大いなる解放そのものからさらに解放されることによって、初めて自分固有の思想的立場を確立することができたのである。

明らかに「山上の木について」の若者は、『人間的』の時期のニーチェ自身を、Zとは別の人格として描いたものなのである。『人間的』序文の次の文章を、「山上の木について」における若者の描写と読みくらべてみよう。

あらゆる深い疑念の中には、どんな婦結が含まれているか。つまり、あらゆる絶対的な視線のちがいののおかげで、こういうちがった視線をもつ者には、どんな孤独の霜と不安【Frösten und Aengsten der Vereinsamung】が刑罰として科せられることになるか。こういったことの何ほどかを見抜く者は、次のこともまた理解するであろう。すなわち、私がいかにしばしば、私自身から回復するために、いわば一時的に自分を忘れるために、どこかの物陰に——つまり、何らかの尊敬や、敵対や、科学的知見や、軽率さや、愚劣さの中に、身を隠そうとしたかを理解するであろう。[MA1: “Vorrede” 1, KSA:2/13-14]

「山上の木について」でも、若者はZの姿を見るなり「逃げた」（つまり身を隠した、KSA:4/51.2-3）と言われており、そして若者はいま「孤独の霜」（der Frost der Einsamkeit, KSA:4/52.9）にふるえていると言われていた。若者の描写は、『人間的』の序文でこの書を書いた当時のニーチェ自身のことを描写している文章と、正確に一致している。ニーチェはこの節で、『人間的』の当時の自分自身の姿を、ひとりの若者という姿で登場させ、この若者に対してZが教えを説くという形をとって、ニーチェが『人間的』の当時の自己自身をいかに自己超克しているかを描いてみせているのである。

### 3. 「子供と結婚とについて」

Zが単数の相手に語りかけている箇所を、ニーチェの理想が現実のニーチェや過去のニーチェにむかって語りかけている自己対話のドキュメントとして理解する、という視点から『Z』を読みなおすことで、この書はまったく新しい光の中で見えてくることになる。ここでは、この視点からこの書を網羅的に解釈している余裕はもちろんないが、あといくつか、興味深い点に関して指摘しておくことは、有益であろう。

Zが単数の相手に語りかけている箇所の中でも、とりわけ印象的なのは、第1部の末尾の近く、「子供と結婚とについて」と題された節の、冒頭部分である。

私はおまえひとりだけに聞きたいことがある、私の兄弟よ。私はこの間を、測深錘のようにおまえの魂の中へと投げ入れる。おまえの魂がどれほど深いかを知るために。

おまえは若い。そして子供と結婚とを願っている。しかし、私はおまえに問う。おまえは子供をもちたいと願うことが許されるような人間であるか？

おまえは、勝利者であるか、自己征服者であるか、官能の命令者であるか、おまえの徳の主人であるか？ このように私はおまえに問う。[KSA:4/90.2-8]

「おまえひとりだけに」(für dich allein)と、特に相手をZの「兄弟」であるニーチェ自身ひとりだけに限定しているのは、ほかに類例のない言い方であり、ニーチェにとって特別に重要な意味をもった主題についてこれから語られることを予感させるものである。その主題が、「子供と結婚とについて」という主題であることを、意外に思う人もあるかもしれない。なぜなら、少なくとも伝記の事実を見るかぎり、ニーチェは結婚というものにおよそ無関心であったように見えるからである。彼がルー・フォン・ザロメに二度も求婚して二度とも断われたという、ルーが書き残した逸話を、最近に至るまで多くの人がそのまま真に受けてニーチェの伝記にとりいれているが (cf. e.g. Safranski, 2000: 256 sqq.)、実際のところは、ニーチェのルーに対する感情は、いわゆる「恋愛」感情とは程遠いものであった。彼が熱烈にルーと一緒に時間を過ごしたがったことは紛れもない事実であるが、その動機は、結婚などとはまるで無関係なものであった。

私はこういう〔ルーのような〕種類の魂を渴望しています。それどころか、私は近々、それを強奪しに行きます——私が今後10年でやろうと思っていることのために、私はこういう魂を必要としているのです。結婚はまったく別の問題です——私はせいぜい、2年間の結婚にしか同意できないでしょう、そしてそれも、私が今後10年でやらなければならないことのためにすぎません。[An Rée, 1882/3/21.

KSB:6/215.13-19]

ニーチェが「今後10年でやらなければならないこと」とは、もちろん永遠回帰思想を十全な形で提示した著作を完成させるという事業を意味している。彼がルーをまったく「女」として見ていないことに業を煮やしていたのは、むしろルーの方であった (cf. Kaufmann, 1968:48 sqq.; Binion, 1968)。ニーチェが彼女との交際に何を求めていたかは、彼の書簡からはっきりと読みとることができる。

私は、あなたの教師でありたいと心から願っているのです。結局、本当のことを全部言ってしまいますが、私は今、私の相続者であることができそうな人々を探しているのです。私の書物の中では決して読みとることのできないくつものものを、私はもちあっています——そして、それを植えるための、もっとも美しく、もっとも実りの多い耕地を、私は探しているのです。[An Lou, 1882/6/26, KSB:6/249.29-34]

女性と二人きりでいる時も、ニーチェは自分の「哲学」のこと以外はまるで考えていなかった。彼が女性に対して異常なほどまったく関心を示さなかったことは、ワグナーがニーチェを男色趣味者ではないかと疑った、という逸話にもはっきりと表われている。ニーチェは生涯をつうじて、頭痛、吐き気、眼痛、不眠、発熱、慢性的な倦怠、といった症状に悩まされつづけた人であったが、ワグナーは、ニーチェがこんな病気をもち、さらには異常なものの考え方をするのは、男色と過剰な手淫とが原因であるとみるべきだ、とニーチェの主治医のオットー・アイザーに助言した [cf. Ottmann, 2000:24; Benders, et. al., 2000:417; KSB:6/405.38-42]。もちろんこれが、何の根拠もない下劣な想像にすぎないのは言うまでもないが、しかし、ワグナーにこのように疑わせるほどに、ニーチェが女性というものに無関心であったことは、確かな事実である。ニーチェは生涯に一度だけ、マティルデ・トランペダハという女性ピアニストに求婚したことがあるが、これは見るからに奇怪な求婚の仕方、彼はジュネーヴ滞在中にたった三度会っただけでろくに言葉も交わしていない彼女に、唐突に求婚の手紙を送ったのである。当然この申し出は友好的に拒絶された。あとで妹に、まるで決闘状でも送りつけるようなやり方をとがめられたニーチェは、「でも、天に守られる必要があるような慣習的な結婚よりは、突然の非理性的結婚の方が、はるかにいいだろう」と答えたという (Benders, et. al., 2000:359-361)。この逸話は、ニーチェが世間一般のいう意味での結婚というものに対して、いかに投げやりな関心しかもっていなかったかを、はっきりと示している。

しかし、もしZが単数の相手に語りかけている箇所を、ニーチェ自身にむかって語りかけている自己対話と解するなら、「子供と結婚とについて」の節は、ニーチェが子供と結婚とにあこがれているということを語っていると解さなければならない。そして彼は確かに子供と結婚

とにあこがれていたのである。ただしそれは、先の書簡にもはっきりと語られていたように、哲学のために、思想のために結婚し、自分の思想の「相続者」をもつために子供をもうけるといふ、世間一般の通念とはおよそかけ離れた考え方にもとづいていた。こうしたニーチェの人生の理想を、「子供と結婚とについて」の節は、Zがひとりの「友人」にむかって教えるという形をとって提示しているのであり、そういう意味で、この節もやはりニーチェの自己対話を形にしたものなのである。

#### 4. 「隣人愛について」

##### 4.1. 形而上学としての永遠回帰思想

以上で示された「Z」の読み方は、単にこの書に対する新奇な興味深い読み方のひとつであるというに留まるものではない。この書をこういう視点から読むことによって、ニーチェの思想の極点である「永遠回帰」思想をいかに理解すべきかについて、重要な示唆を得ることができるのである。

「Z」第1部にある「隣人愛について」と題された節は、全体としては、「おまえたち」と呼ばれている複数の相手にむかって語りかける形をとっている。全体としてはこの節は、キリスト教が教えるような意味での「隣人愛」が、じつは「たちのわるい自己愛」(schlechte Liebe zu euch selber) にすぎないことを、「おまえたち」にむかって暴露することに費やされている。この論点自体は、ニーチェの著作を読み慣れている者にとっては、わかりやすいものであり、特別な解釈上の困難はない。

ところが、この節に2箇所だけ、語りかける相手が「おまえ」という単数に入れかわっている箇所がある。ここに、じつは重要な思想が隠されているのである。まず第一の箇所から検討していこう。

おまえの目の前を駆けてくるこの幽霊は、私の兄弟よ、おまえよりも美しい。どうしておまえはこの幽霊に、おまえの肉と、おまえの骨とを与えないのか？ ところがおまえは恐れをなして、おまえの隣人のところへ駆けてゆく。[KSA:4/77.15-17]

「Z」では「幽霊」は、ほとんどの場合に、「神」をはじめとする形而上学的思想の産物をあらわす形象として登場する[cf. KSA:4/35.22, etc.]。しかし、ここに引用された箇所では、Zは「おまえ」にむかって、「この幽霊に、おまえの肉と、おまえの骨とを与えよ」と語っている。言うまでもなくZは、「神は死んだ」と宣言した本人であり、神なき世界で人間がいかに生きるべきかを教える教師である。Zが「おまえ」にむかって、神に肉と骨とを捧げよと言うことは、

ありえないはずである。では、上の文章は、どのように解するべきなのであろうか。

我々は、この「幽霊」の動きに注目しなければならない。「おまえの目の前を駆けてくるこの幽霊」(Diess Gespenst, das vor dir herläuft)を、多くの翻訳は、「君の前方を走り行く」などと、「おまえ」から遠ざかってゆくという意味に訳しているが、これは誤りであって、「herlaufen」は「話者の方へとむかって走ってくる」という意味である [cf. Duden,1996]。幽霊のこの動きの方向をとらえちがえると、この箇所はまったく理解不可能になってしまうので、よくよく注意する必要がある。

そして、ここでも「おまえ」と単数で呼びかけられている相手はニーチェ自身にほかならない、と解してみよう。この場合、この「幽霊」は、ニーチェが望んでいないのに向こうの方から彼にむかって駆け寄ってきたものであり、そしてニーチェはこの幽霊に駆け寄せられたことに「恐れをなして」、「隣人」のところへと逃げ去ろうとしている、と言われていることになる。ニーチェが自発的に考え出したのではなく、向こうから彼のところに襲いかかってきた形而上学的思想、しかも、それを見たニーチェが恐怖と絶望の淵に突き落とされた形而上学的思想。それは、「永遠回帰」の思想以外ではありえない。彼は、この思想に襲いかかられた体験を、「この人を見よ」で次のように語っている。

さていまや、私はツァラトゥストラの物語を語ろう。この作品の根本構想である永遠回帰の思想、およそ到達される肯定のこの最高の形式——それは、1881年の8月の出来事である。〔……〕私はあの日、シルヴァブラーナ湖畔の森の中を歩いていた。ズルライから遠くない、力強いピラミッド型にそびえたった岩塊のところまできて、私は立ち止まった。その時、この思想が私のところにやってきたのである。[EH: “Also sprach Zarathustra” I, KSA:6/335]

本論考では永遠回帰思想の本質について、くわしく解明している余裕はないが、少なくとも次の点だけは確認しておくことができる。永遠回帰思想は、一面では、安易にそれに触れようとする者を絶望の淵に突き落とす、もっとも恐ろしい思想である。なぜなら、生を苦悩としか感じることができず、ただこの苦悩を忘れることによってのみ辛うじて生に絶望することを免れている人間にとって、永遠回帰思想は、この苦悩の生を無限回にわたってくりかえし生きなければならず、しかもそこから最終的に解脱したり救済されたりする道は存在しない、という絶望的な帰結に直面させる思想だからである。しかし他面では永遠回帰思想は、それに「肉と骨とを与える」者にとっては、「およそ到達される肯定の最高の形式」となる。なぜなら、解脱した生や、救済された生だけを愛することは、すなわち現実のこの生を否定することにほかならないからであり、解脱も救済もない苦悩の生を肯定することができる者だけが、真に生を肯定する者というに値するのだからである。

Zの単数の語りかけをニーチェ自身に対する語りかけと解することによって、「隣人愛につ

いて」のこの段落は、まさしく以上のようなニーチェ自身の永遠回帰思想について述べたものと解することができるのである。このように解する場合に、特に注目されることは、これ以外の箇所では「神」をはじめとする形而上学的思想を表わすために用いられている「幽霊」という形象が、ここでは永遠回帰思想を表わすために用いられていることになる、ということである。永遠回帰の思想は、神の思想と同じく、ひとつの形而上学的思想なのであり、ただ神の思想が、現実の生から目をそむけさせ、救済の幻想に浸らせることで生に絶望することを防ぐ思想であるのに対して、永遠回帰の思想は、現実の生そのものを肯定する思想であるということに、両者のちがいがあはれにすぎないのである。「神はひとつの憶測である」[KSA:4/109.12] と言い、神を「人間の作品にして人間の狂気」[KSA:4/35.19-20] であると言うZは、永遠回帰は神とはちがって憶測でもなく人間の作品でもない真理そのものだから受容すべきだ、と言っているのでは決してない。永遠回帰も神と同様の「憶測」であり、「人間の作品」であり、ある意味では「人間の狂気」ですらある。ただそれが、永遠回帰思想の場合には、生を肯定する狂気であるがゆえに、ニーチェはこの狂気に自分の「肉」と「骨」とを与える（自分の全身全霊をこの狂気に捧げる）ことを欲するのだ、と彼は言っているのである。

#### 4.2. 永遠回帰と超人

「隣人愛について」でZが単数の相手に語りかけている第二の箇所は、この節の末尾の直前である。ここでZはこう語っている。

未来が、そしてもっとも遠いものが、おまえの今日の原因であるようにせよ。おまえはおまえの友人のうちで、超人をおまえの原因として愛するべきである。[KSA:4/78.30-32]

「隣人愛」は、ドイツ語では「もっとも近い人への愛」(Nächstenliebe) という。Zはこの節では弟子たちに、「もっとも近い人」ではなく「もっとも遠い人」を、つまり「超人」を愛するようにせよと教えている。上に引用された言葉は、超人を愛せよと教えているという点に関するかぎりは、本節でZが複数の弟子たちにむかって語っていることと同じことを語っている。しかし、上に引用された言葉は、単に「超人」についてだけでなく、「友人」についても語っている。そして、この「友人」は、どこにでもいるような任意の友人ではない。この文章の直前でZがこの友人を記述している言葉に注目する必要がある。

私はおまえたちに、世界が、薄の外皮が、できあがった状態でそのうちに現存している友人を教える。——それは創造する友人であり、できあがった世界をいつも贈与せずにはいられない友人である。

そして、かつてこの友人の前で、世界が巻き物のごとく広げられたように、世界はこの友人の前で、



ふたたび環をなして巻きとられてゆく。悪を通じて善が生成することとしての世界、偶然から目的が生成することとしての世界が。[KSA:4/78.24-29]

巻き物が広げられるように世界がくりひろげられ、そして広げられた巻き物がふたたび巻きとられてゆくように世界が最初の状態にもどってゆく、その様子のすべてを目撃している友人とは、つまり永遠回帰を認識している人ということにはほかならない。この友人のうちでは「世界ができあがった状態で現存している」と言われているのも、彼が永遠回帰を認識する者であることを示唆している。なぜなら、どんな微細な出来事にいたるまでも完全におなじ過程を無限に反復しつづける世界とは、あらゆる出来事に関して「別様にありうる」という可能性が絶対的に存在しない世界であり、そういう意味で「できあがった」（完成した）世界であると言うことができるからである。

ところがZは、このような永遠回帰する世界を自分のうちにもっている友人のことを、「創造する友人」と呼んでいる。永遠回帰する世界は、一点の変更する余地もない完全に完成した世界であるのに、その世界において「創造する」という行為が成立すると言うのは、自己矛盾しているようにも見える。しかしニーチェは、不注意で自己矛盾したことを言ってしまったわけでは決してない。本書の準備期の遺稿にはこう書かれている。

世界はできあがった状態で現存している——善の外皮が。しかし、創造する精神は、できあがったものすらなお創造しようと欲する。そこで彼は時間を発明した——そして、かつて巻き物のごとく広げられた世界は、ふたたび大いなる環をなして巻きとられてゆく。悪を通じて善が生成することとしての世界、偶然から目的を生むものとしての世界が。[KSA:10/218-219]

創造する精神は、一点の変更する余地もない完成した世界すら、創造の対象にしようと欲するのであり、こうした創造をおこなうために、創造する精神は「時間」という観点を持ちだしてきて、悪を通じて善が生成する世界として、偶然から目的を生む世界として、世界を解釈するのである。根本的には単なる偶然の集積にすぎない世界から、創造する精神が解釈によってとりだしてきた目的とは、「超人」の理想のことであるのは明らかである。それは、我々がいま問題にしている箇所で、「偶然から目的が生成すること」について語られた直後の段落で、「おまえはおまえの友人のうちで、超人をおまえの原因として愛するべきである」と言われていることにも示唆されている。偶然の集積としての世界は、究極目的の存在しない世界であり、そういう世界に生きる人間が、それでもなお生の究極目的をもとうとするならば、この目的は、偶然の集積としての世界に生きることそれ自身を肯定するという目的以外ではありえない。超人とはまさにこうした生の肯定者のことなのである。Zは、永遠回帰の世界（単なる偶然でありながらしかも完成した世界）をもっている友人が、同時に超人の理想を与える者でもあると

ということ、そして、こういう意味での超人の理想こそが生の原動力（原因）となるべきであるということ、「おまえ」にむかって教えているのである。

要するにZはここで、永遠回帰思想と、超人の理想との必然的関係という、ニーチェの思想全体にとって決定的に重要な事柄を語っているのであり、そしてまさしくこのもっとも重要な問題に言及した途端に、語りかける相手を複数から単数にきりかえているのである。永遠回帰思想は、ニーチェのもっとも個人的な体験にもとづく思想であり、彼はこれを他人と容易に共有できるとはまったく思っていない。『Z』第3部で、永遠回帰思想が十全に姿をあらわす場所が、人間たちの世界から隔絶した洞窟とされている理由も、まさしくここにある。だからこそニーチェは、『Z』第1部の段階でもすでに、永遠回帰思想を暗示することを語る時には、それをZの弟子たち全員に対する普遍的な語りとしてではなく、ただニーチェひとりだけに対する個人的な語りとして提示しているのである。

Zが単数の相手に語りかけている箇所は、いずれもニーチェ自身の何らかの個人的な体験を念頭に置きながら、その体験を自分自身の思想の中に同化するためには何が必要かを語った箇所である。彼が若い頃から、常識からみれば異常なほどに自伝をくりかえし書くことに固執してきた人であったことはよく知られているが、それは単なる自己顕示欲のあらわれではもちろんなく、自己自身との不断の対話の中で自己の体験を同化し、自己超克することが、彼が自己自身でありつづけるために必須のことだったからにはほかならない。Zの単数の語りかけも、これと同じ自己対話と自己超克とのドキュメントなのである。

私のツァラトゥストラのどの一言をとっても、現代の理想に対する凱旋する嘲りであり、そして嘲り以上のものです。そして、ほとんどどの一言の背後にも、個人的体験があり、第一級の自己超克があるのです。[An Elisabeth. 1883/8/29, KSB:6/459.25-28]

#### 【引用・参考文献一覧】

ニーチェのテキストは、*Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1980を使用した。引用・参照箇所は、“KSA”という略号のあとに、巻数、頁数、そして必要に応じて行数を、KSA:4/100.10といった形式で示した。

ニーチェによる「ツァラトゥストラ」以外の公刊著作から引用する場合には、以下の略号のあとにアフォーリズム番号を示し、つづいて上記の形式で全集版の頁数を示した。

- UB4: *Richard Wagner in Bayreuth.*
- MA1: *Menschliches, Allzumenschliches. Ein Buch für freie Geister.*
- FW: *Die Fröhliche Wissenschaft (“la gaya scienza”).*

- JGB: *Jenseits von Gut und Böse. Vorspiel einer Philosophie der Zukunft.*  
 EH: *Ecce Homo. Wie man wird, was man ist.*  
 FWag: *Der Fall Wagner. Ein Musikanten-Problem.*

ニーチェの書簡からの引用は、*Friedrich Nietzsche Sämtliche Briefe, Kritische Studienausgabe in 8 Bänden*, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1986 を使用し、“KSB” という略号のあとに、巻数、書簡番号（頁数ではなく）、行数を示した。

それ以外に本論考で利用された文献の一覧は、次のとおり。

- Benders, Raymond et al. (Hrsg.): (2000) *Friedrich Nietzsche. Chronik in Bildern und Texten*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München.  
 Binion, Rudolf: (1968) *Frau Lou. Nietzsche's Wayward Disciple*, Princeton University Press, Princeton.  
 Duden: (1996) *Duden Deutsches Universalwörterbuch*, 3., neu bearbeitete und erweiterte Aufl., Dudenverlag, Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich.  
 Kaufmann, Walter A.: (1968) *Nietzsche. Philosopher, Psychologist, Antichrist*, 3rd ed., Princeton University Press, Princeton / New Jersey.  
 Naumann, Gustav: (1899-1901) *Zarathustra-Commentar*, 4 Theile, Haessel Verlag, Leipzig.  
 Ottmann, Henning (Hrsg.): (2000) *Nietzsche-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart / Weimar.  
 Prossliner, Johann: (2002) *Nietzsches Zarathustra*, Serie Piper 3475, Piper Verlag, München / Zürich.  
 Safranski, Rüdiger: (2000) *Nietzsche. Biographie seines Denkens*, Carl Hanser Verlag, München / Wien  
 Weichelt, Hans: (1922) *Zarathustra-Kommentar*, 2.Aufl., Felix Meiner, Leipzig.

- 高橋健二・秋山英夫（翻訳）：（1965）ニーチェ「こうツァラトゥストラは語った」「世界の大思想」第25巻、河出書房  
 永上英廣（翻訳）：（1967）ニーチェ「ツァラトゥストラはこう言った」2巻、岩波文庫、岩波書店  
 手塚富雄（翻訳）：（1973）ニーチェ「ツァラトゥストラ」中公文庫、中央公論社  
 吉澤伝三郎（翻訳）：（1979）ニーチェ「ツァラトゥストラ」ニーチェ全集第9巻、理想社  
 小山修一（翻訳）：（2002）ニーチェ「ツァラトゥストラ」2巻、鳥影社

【2008年9月9日受付、10月28日受理】

# Gespräch zwischen Zarathustra und Nietzsche

NAKAHARA Takashi

Im ersten Teil von *Also sprach Zarathustra* spricht Zarathustra gewöhnlich mehrere Menschen an, aber ausnahmsweise gibt es Fälle, wo ein einziger Mensch sein Hörer ist. In dieser Abhandlung erweisen wir, dass dieser Mensch kein anderer als Nietzsche selbst ist. Nietzsche nämlich, der durch Zarathustra auch sein eigenes Bild darstellt, schildert in solchen Fällen seine Selbstgespräche, die verschiedene Aspekte seiner »Selbstüberwindungen« ausdrücken. Besonders bemerkenswert in diesem Zusammenhang ist ein Paragraph »Von der Nächstenliebe«, in dem Zarathustra seinem einzigen Hörer den Gedanken der »ewigen Wiederkunft« andeutet. Dadurch, dass wir diese Stelle als ein Selbstgespräch Nietzsches interpretieren, ergeben sich wichtige Kenntnisse über seinen Wiederkunftsgedanken, z.B. dass er ihn als eine Art metaphysischen Gedanken konzipiert, und dass der »Übermensch« den Menschen bedeutet, der das Leben in der Welt der ewigen Wiederkunft bejaht.